湖月抄

うつせみ

Freer Gallery of Art
Washington, D. C.

7152

空蟬 并一

此巻ハ源氏十六歳の夏乃ことなり。以歌為巻名ト
空せミの身をかへてける木乃もとになほ人からのなつかしきかなとあれ
并の證ハ先(マヅ)横(ヨコ)とかくとかく物語を両枝の物語乃ごとし 但
此物語にかぎりて竪(タテ)乃并あり。此物語にハ并に二の品あり。一
にハ竪。二にハ横。三に横竪といふあり。竪とハ此巻の類なり。此
巻ハ帚木のまき乃うちを半つゞきたり。横とハ蓬生の巻の類なり。
そのかくし乃初の時よりつゞく也。ことつゞくしのこと也。先
にはべきものゝそこにいるれねバ別(ベツ)に一巻として書也。横竪とハ
これハ末摘花の巻乃類也。そのまゝハ若紫より前の事あり。其まゝ
ハ若紫より後の事あり。並(マデ)の事ハ史(シ)記(キ)の本記乃外に列(レツ)傳(テン)と
いへるにおなじ

ねられたまはぬまゝに
花 帚木巻の終の詞につゞく
あてなるを
細 中河のやどりにまかり給ひ
かくのよしなり
これハかゝる人
細 源氏の好色と自稱(ジシヨウ)し給ふ
なり 箋 源氏の君のこれに
つゐてのおほせハなまさとと
の自稱にハあらで次小君を
ゑらひめんとの料簡也
まづしひてある
細 小君がありさま皮空蟬のて
さぐりのさまひにかよひし似
通ひたるとなし
あなかちに
師說 これ帚木の巻にまはれ
くやしんところなりとかそ
いまさらの事どもいふなとも
あそこにはしかりかくれなそ
ちかよりゆう人もかへりかゝ
らんとなり
まめやかに
思ひのほかも見えぬよけんとの
細 前のやうなるもまさりけり

ねられ給はぬまゝにハ我ハかく人ににくまれて
もならはぬをこよひなんはじめてうしと
世を思ひしりぬれバはづかしくてなが
らふまじくこそ思ひなりぬれなどの給へバ
涙をさへこぼしてふせり。いとらうたしと
思す。手さぐりのほそくちいさきほど
髪のいとながゝらざりしけはひのさま
かよひたるも思ひなしにやあはれなり。
あながちにかゝづらひたどりよらむも
人わろかるべく。まめやかにめざましと
思しあかしつゝ例のやうにもの給はず。
夜ふかう出給へバこのこハいといとほしく
さうざうしと思ふ。女もなみ

（小注）空蟬の心をさして云 ／ 小君まゐりて見えぬので君の申さる ／ 細 小君へ ／ 源氏の心 ／ ちぎりそこなひ ／ 空蟬の方達に空蟬を見入ないし ／ 空蟬の身と思ひそまさる ／ ちかくおもひて ／ 小君ながら ／ まゝつかなく ／ ひとしく思ひやることを ／ 小君へく ／ 空蟬の心へ太かくうらむことなく ／ うるはしく思ふ心

まとはし給へ 纒(まとふ)也
秘 下たちくるしきて
箋 普通の人にもおしなべて妻
人と云心そここと八空蟬乃
さまか(く)
秘 おほしこりけ
細 空蟬もおほしこりて音
信もなきことしきれなり
思ひつく
これ程にて
細 かくて結果るへしとそ
なき文待も思ひかけられ
さりとし
られくくを
孟 慨哉(ウレタキ) 悵哉(ウレタキ) 也 以上日本
ときうれ てうそものして
孟 斟計(タバカリ) 方便(タバカリ)

かたはらいたしと思ふに御せうそこもたえて
ことなくておほしこりにけると思ふにも
をやがてつれなくてやみ給ひなましかば
うからまし。しひていとほしき御ふるまひのたえざ
らんもうたてあるべし。よき程にてかくてとぢめて
むと思ふものからたゞならずながめがちなり。君
は心づきなしとおぼしながらかくてはえや
むまじう御心にかゝりて人わろくおもほしわび
て小君にいとつらうもうれたうもおぼ
ゆるにしひて思ひかへせど心にしも
したがはずくるしきをさりぬべきおりみて
たいめんすべくたばかれとのたまひわたれば

うかゝくふかくも
秘 まつはしまつはしのたまへ
ついさうしとうまてしとみ
て小君かたへさへきたり類
掌中也
さのりし思ふ
細 家あるしも国にくたり
にみなかり
夕やみの
河 夕やみとはみちかおぼし月
まちて人見ぬばかりこそのま
かとみ難
まうけるまとるこみて
と教のま國ちらへのかれ
ちひとへり給ひていて給ひ
源氏とへ見しかゝらみて
せうれし
こゝにて入れ
紀守の国の宿直人等も小
君ハ子とかれなれ見る
ゆゑついせうもせぬ也源氏
心安くおもへり

わづらはしけれどかゝるかたにてものたまひ
まつはすはうれしうおぼえけり。をさなき
心ちにいかならんおりとまちわたるに
きのかみ国にくだりなどして女どちの
どやかなるゆふやみの道たどたどしげなる
まぎれにわが車にてゐてたてまつる。これ
されどいかならんとおぼせどさのみもえ
おぼしのどむまじかりければさりげなき
すがたにて門などさゝぬさきにといそぎお
はす。人見ぬかたよりひき入ておろしたて
まつる。わらはなればとのゐ人などもこと
にみつけずついせうしよりこず心やすし。この

ごずつあらくハかりつと
細 小君ゟ入さら給ふと突ハあら
いかゞりの人もよそ見んとでを
へきぬとし女房達のこえ
みしの御方の
細 伊予介乃むすめ軒端
の荻なり。空蝉のまゝ子
この家乃西のつまにある
つらてもてあるうや
碁うちせの人
孟博物志云堯造圍碁ヲ
西さ面よ 細 此今源氏ゟ
つまの方よりもらつひ
て西乃方へ見給たり
もやの中柱 本屋くわか
しの書に居所く
こそあか、の
花 女房の装束六月六日
よりひとへくるれとうろ
なり。ひとへ一ッどのの
黒きうろ物なり。此時ハ
うらにひとくとまずこ
きしいろえらきのす
なり。こき紫まそめうろ

つまどにたてまつりて、我ハみなみのすみのまより
かうしたゝきのゝしりて入ぬ。ご
たちあらはなりといふなり。なぞかうあつ
きに、このかうしハおろされたるととへバ、ひるより
にしの御かたのわたらせ給ひて、碁うたせ給
ふといふ。さてむかひゐたらんを見ばやとおもひ
て、やをらあゆみいでゝ、すだれのはさまに入給ひ
ぬ。このいりつるかうしハまださゝねば、ひ
まみゆるによりて、にしざまにみとをし給へ
ば、このきハにたてたる屏風も、はしのかたおし
たゝまれたるに、まぎるべききちやうなども
あつけれバにや、うちかけていとよくみいれらる。

あつし 河海よ紅のきこえさし
ほされたりいつとみかくえ
作り
何よりあらん 細 ひとへきぬ
のよまうハさそも花色ふ
流あさとなもうすかげす
きうちまえくわかぬく
身つき 細 碁とおす事ハ年
あらハなりくさとも袖行
より引うくをかり用意淺う
らぬさ面く
今ひとりハ 細 軒端の荻之
ろきの方より見給ふに
よひてしむきなりみよん。
おりうく見えとされあへし
わさあひの 細 二藍之うへと
をいふ同しうすくあか花
あさ花二色よそむうき
なり花二てうちきへ唐衣
と云ふ物せさら付表着のさん
てり唐衣の代りに着きて
分物なりとぞ
ばうぞく 細 河海よ八
傍側云ご花香りハ縦

火ちかうともしたり。もやのなかばしらにそばめ
る人や、わが心かくると、まづめとゞめ給へば
こきあやのひとへがさねなめり。なにゝかあらん
うへにきて、かしらつきほそやかにちいさき人の
ものげなきすがたぞしたる。かほなどハさ
しむかひたらん人などにも、わざとみゆまじう
もてなしたり。てつきやせ〳〵にて、いたう
ひきかくしためり。いまひとりハひんがし
むきにて、のこるところなくみゆ。しろきうす
ものゝひとへがさね、ふたあゐのこうちきだつ
ものないがしろにきなして、くれなゐのこし
ひきゆへるきはまでむねあらはにばうぞく

ばうぞくなりまさりてとくぞ
こゝろうるはしからぬと縦れ
とし傍側 誤 宜敷 旁若無
人のれなるへきさんとくら
なかなるさかりゆーし
そゝろか 細 をこりしたるさや
うまや 同 失スルト けりのある
さゝ㒵をとふや 細 なし
むべしておやの世になくしそ
八段可然むをめしてそ
みすからめとなり
はかしくえ然
つくけちわとさへて
細 人ハ東山より八用ある
こゝろもかゝり心人に
わころにろ方よりく
ぶゝろもしろきとし
へきさるへく
ゆめしく然ハし白と物
で気へしもろかなん
とそくやうくしハ人の性
とみへてうつしそく
しなるさよハあるし
細 一りしかしらやうるはしきこと

なるもてなしなりいとしろうおかしげにつぶ（かくらうかく）
つぶとこえてそゞろかなる人のかしらつきひ
たいつきものあざやかにまみくちつきいとあ
いぎやうづきてはなやかなるかたちなりかみは
いとふさやかにてながくはあらねどさがり（細 そばめる人のさまに納）
ばかたのほどいときよげにすべていとねぢけ（細 かりそめにきこえ）
たるところなくおかしげなる人とみえたりむべこ（孟 宜歟）
そおやの世になくハおもふらめとおかしくみ
給ふ心ちぞなほしづかなるけをそへばやと
ふとみゆるかどなきにはあるまじごうちは（箋 草子の詞へ）
てゝけちさすわたり心とげにみえてきはぎは（細 清て後之）（孟 心疾 心早 さく）
しうさうどけばおくの人ハいとしづかにの（孟 早速 いそかしくものさハかしきさく）

かりこれも捨ておたらく
あらそ云 孟 圍碁の綴く
又關 義 闕ハだ目と云
いり結ハうさむらく
おくの人 細 空蝉之事義
ろうくかうへし死るの
義有不審
奥の方にむかへる人とよ
なをありめる南向の家よ
てをもしもろうひて東
のふよりにむかひやうや
ちるつとあるめ 細 他とむ
よの三世あるハ指合モテヨフしふ
みなるへし
とりひ うゆひをとえ大ふ
のんおうへへし
いよのゆげた 細 ...
とうよりて又今文の傳よ
へトアミとうのふせなし似合よう
捌し 孟 六花集よ古哥を
おなりいよのゆのゆげさん
ワかで八左八右八九中八十室で
へて成三ありと云ゝ 又雜

どめてまちたまへやそこはぢにこそあらめこの（中空蝉詞）
わたりのこうをこそなどいへどいでこのたびは（孟 劫つひなく）（細 軒端の荻の詞）
まけにけりすみのところ〳〵いで〳〵と（細 源氏のえきうつ所の事也）（軒端荻）
ゆびをかゞめてとをはたちみそぢよそぢなどかぞふ（十 二十 三十 四十）
るさまいよのゆげたもたど〳〵しかるまじう見（空蝉のありさまを書）
ゆすこししなおくれたりたとしへなくくちおほひ
てさやかにもみせねどめをしつけ給へ（ゆふくと本性なるべし）
れハおのづからそばめも見ゆめすこしはれ（源氏の）
たる心ちしてはななどもあざやかなる所な
うねびれてにほはしき所もみえずいひたつれ（細 鼻のさかりとおほし）
ばわろきによれるかたちをいといたうもてつ
けてこのまされる人よりは心あらんとめとゞめ（軒端荻く）（空蝉の事也）

藝ノ奇よハ□よの隅のはさいくもいさゝかしたゝかにもや君ぞさかしと見えしとあり
すぐしておそられたり 細 これの方なりやりかた わしゐたるさまなり
目ふられたる 細 これたかきし八晴なりひとびとなどなりて又小めめりくへおのぶきを見えしこ 此様才
ゝ遊淡 孟 目のうへ乃腫するやうにおぼえて
紛ひまそて 師説 寝おきひまてる顔のやうなりとく目の腫ぼうあく
のひらまじくまろうさまよわりくちらと 空蝉ハよりしねくうらるれども進退あくのうそて
るましにようくえるりとく見え人への教也
このまゝられる人 細 けかくの荻也うちハ空蝉ハ
そわられて 河 たゝ一重て
かり後成て女性もねこ
あさゝらく
えんの所りの人を
細 源氏よえてまてすみ
大略うつくしひさゞとの
さやまへりけがすこにすを
けそしぬうちへとひまを
しきふうハなまさかうま
今此え様どかまいうとく
アまへ
ゐやまへ 孟 覗其私屏
日本紀 垣間見 万 関

きさ御しうりふかさてもくおい那つゞきみじ（此これり八軒端荻をいふ）
げうち紙いよくほゝりうまうらとけてぼう
ひたじそほうれバみひわわくこえこゑ。
さらうさまいとゝひゝさゞ御かりりあ（あわらの女房共のさゞそとく）
くほえしは出かりなりうまずわずぬ（源よまれくしくんわるく出ずは少く）（良目ヲ五好色之）
けにうれいられもえ出がりしまずけゐ（出の）
うゝとゝの給ふれひとくどうとけてう
しゆびきつるひそどもうらんどとのと（せこ出てき給て）（ここ形ならえせぬく）

小君いてころ 細 小君ヵおうろ
乱とうたれハ之方くさ
給かり
わさとの戸ぐち 細 前より
オ戸口ま居給しやるる
して小君よえてまつく
いとふうけるしと
孟 のそきもおりして小君
うまつると思ふまゑてかくは
ゝり居るのことを忍ひゐゝり
やうにしてきうこの荘ゝ
しなうんし小君か思
てかとりうしもるしと
ゆきつくし
あもしつうあるさてまゐてう
とるを知てころへし 細
小君詞なり此人定て
へうりへきとくし
うまひるの作しけんうるうに
小君さやうにさいへうろるへ
けうら八空蝉もうひくへき
をしきあるねよてこそと

こそきのへうくうらとけさうしへのあうこ御ら
いまみならはべしつらうつりまれ八（さかくりうろうまえてうし）
なるこゝろもるのさまや御かくいと出しるが（孟 あまりもえをそかうとの）（くるしからぬさまと）
らひさきうまく給へまゆりそたに君いでらる心ち（ぞうぞしなうかげりて行くらし）（源のへく）
とれどやとしう給ぬるさどのうとら□よ
まねのへうそけ□かうじ昔あしとて出いで（小君ヵ思く）（細 小君ヵ詞）
らぬ人ゆて覚ありつしも里给しぞそて（軒端の荻のうへ給さく）（源氏詞）
しひのやうへしてんとするうちわたまほしう（句）
らうしてそわわべれとのまへバなさとそう給のあく（迷惑ふくてれかうへくれえ）（源の之）
よくつどねるあいだそう給すんとこそ夜さも（細 あさきす前れてる）
るびしはべきをりとえましてぬしもめでうるハあ
出てものひさんどへの勢ことへくえいげすわうと（あかりまきて）

こゝろそはつかしや
田のかりさ夜とゆへ
まかくらうこれを
哀目まされね也
らうてそまうらん
源氏と空蝉のうへなり
をとうとうハいうと
細 源の小君にをその荻のつま
と問給へ
さうし さもはんとも
えびもうらいせし
ふやうよのたまさこれと
いふしてます

とまちつゝごうちはてつるにやあらん。
うちそよめきてひと〴〵あかるゝけはひなど 孟 退也 退散となり
すなり。わかきみハいづくにおはしますならん 細 小君と女房達のこゑ
らん。このみかうしハさしてんとてならすなり。
しづまりぬなり。入てさらばたばかれとの 源詞
給ふ。このこもいもうとの御こゝろハたわむ 小君心 空蝉之
ところなくまめだちたれバいひあはせんかたなくて
人ずくならんおりにいれたてまつらんとおも
ふなりけり。きのかみのいもうともこなたにある 源詞
か。われにかいまみせさせよとのたまへど
いかでかさハはべらん。かうしにハきちやうそへて 小君か言也
侍りときこゆ。さかし。されどもとをかしくおぼせど 細 これも持て
見つと

このらうひハ 細 小君か入へくハ
孟 こゝへてハあり
今度 花丸ハ昔男女の通称 日本紀
せとのれなしつみうこと
し
風吹とあせ 引歌
風かけと今ハいひて戸
ハさしつわすれと君に
いひてしものを
たゝえひろけて 細 屏風
からへし吹の前よえなり
いへるみちうかわらハ
孟 前に小君此度ハ妻戸をて
こそつろとまての時戸を
ぬし 童なるへし
いふそとこゝ御しさ
細 いふよしみかつる 居
源の心なるをかりたる
さなり

はしらせじいとおしとおぼして夜ふくる
ことのこゝろもとなさをのたまふ。こたび
ハつまどをたゝきて入。みな人〴〵しづまりね
にけり。このさうじぐちにまろハねたらん 小君詞
かぜふきとをせとてたゝみひろげてふす。御たち
ひんがしのひさしにいとあまたねたるべし。と
はなちつるわらハもそなたに入てふしぬれば
とばかりそらねして火あかきかたに
屏風をひろげてかげほのかなるにやをら
いれたてまつる。いかにぞをこがましき事もこそと
おぼすにいとつゝましけれどみちびくまゝに
もやのきちやうのかたびらひきあげていと

やつゝなかりしも
細 源の詞よかたまめつらしく
そのまゝ人またしかるゝ論
のいらへなきらく
女ハさこそ 細 空蝉の心之
此程の源氏乃ふるまひ文路
といへこともいとおもふを
こらへまかれりたる中く
わりなきかなる
拾遺 君まつと闇のつき毛の
我もしひとはけてつるまる
有としは渋
まうしぬこのめも
細 しかいさかなるいなるへ
くらられてまたこのめも
いしなからもうめなれ
けべり河海よみへては
いとうくいひしまさて

やとらいりまへしもれどもされたるかいはつわか心
の心ぞ乃なくひやたるゝちゝのいとをしう
りもせは女ハさこそすれあをとられし
きこえすひなをどおやもとくるのやうかう おほ源氏よおひしるし
ましきまじきれわうしもなかそこひめてそひらけ
くしゝれどもしひわかうこひめてそひらけ
ちよは私しれどもひゝるたげなよ 寝られぬく
さは私さあかちなれば主すしぬこのめも 日のてるあかきさ
こよひなくうけしちつゝろきこ わくの荻之
いとなくうれしとみてゆめしくろうきこ
しひさるとこみて いゆめしくろうとこ 内えし
なくてねよそのあとうまへなきなくいと 軒端の荻之
よくましきえしうらけゝひ乃いとし 細 源のけあらひ 源氏のこ
きこえひしれその自く
かくしくちよはゆよめとりしはさ 空蝉之

なまひとくらうまうまつる下にしまさかしに
くるしくれどもうちうちわざとけさうしひいと 源氏こ 分限(だいこん)ちいなくへし
ありしおもかく笑てしもうくをとおひ 空蝉心く
されどもやとそしおかくもそしわかるひゝへ
おもいそてもつりおもよなから君そいか
おそてふうひゝりうきへひやとくる御そ 細 空蝉一人と源の已下て
極ゝのしりの二人ぞうりぞみしうちをかとし 注之
やりてしまへるよなしとひゝりそくりのく
きくおぼしじとじねしもしけないしいうさ
さるさな夜などもそわしくうりてやう 細 空蝉よくうちゝくさ
くみおしうしてそおさまうしくちゝろ はなくいふなく
まじされどひゝさくしてそりのてみんへんとも 細 分またのやうにいふせきなく

なかしうき 分退うこくん
なさへし
ひるのひろとさて
こうもるにしねてひゝく
をいさうたりうちをさと
たねさゝへしこれそひ
人ひろとしきすり
細 まへしけりひなりハ
空蝉よりいかくしれ
かりされしも別の本ハ べし
そうしもようくさうたり
りのくしきそくさ
あらしもよろしそ
細 空蝉のもおりさるを
人知給りなく
やうしくえわらう給て
細 空蝉よおくらゆ下之
そくめ給なり
ふさうへとうちのなくも
空蝉をとみひて来るまうく給
まへさうへとと軒端の荻、
せうちえんもまく

かいの人と　細 是は紙とをうと
ゑをそへなりなるすしれと人は
人の詞なりして空蝉と我を
も又給ものぞとハ入りてをこ
うきはうれ人きとをく
のおはしうりつ　細 碁とお
し時又姉しま程ろのく
ゆくうしくを指まをし
いとはしさみぞりてそし
師可哉んつひを申をしーて
むかり
細 おさくせをとるしぬ人の
あんかもとひきいりを
あはりいあへかみなもかれ
え。さうかり
秘とことをしせしと
細 源の御ゐる人い秘と云
せことしてよりぬつうさと新
この萩は空蝉は気くれ
かのかくハかれりしと知さ
人あるよ新し給く空蝉
の新はつまうさまと出
しかもとあく

そぐ悔しくわやしとおもふべし。かいの
人とおぼつねよふしんもいぎくらうのうくらゐろ
わめれなびひるくおもとこそしおもとめし
おもひてのおもうりつらはもげるしくはい
うごはちんとおもほしわきうもしろくとれらう
めさしかたしめうし。やうりく見さめく。いとしか
ほどしとある悔しときよおもさされさそしきゆて。
すまのむふらくいきとかしさようぶいすれし。世の
中ともさてもひ云ぐしぬ新しりのいたされうなえ
いまうくさいめてわしかもおもしひまあじ。ぞす。
見れるとおもてしをしおもわりほをとし。いつめて
うつりてそとのららよおもひめぐらしさんも。

さひくのけうさとぶん
細 おつくの御方さらへも新
くの荻への御かへしと云お
し給く
こうんない
細 世まかれまうへい源のく
の給ともさいなきまうさと
さうり見へるものとしく
さこしぞ　口ほむしとあう
いていきかくふくうどう
あばとおりそのやうよ
さしうそくにろことあなう
やきうれどきざわくきゆ
へは空蝉へのこくろさしい
らもしりくさろく、
おやすくは
細 とふもしろくうしと云れ
給つるなり

わづこめかはきまりておわくねとおれつくさ
人のおもひ給ふよ秘つむもさそうまいなお
いしられいざひくゐけるさた人はまくろけさ
おもひしす悔とりとうりひおもし給ただらん
人は知しはんぐれどもうごさいとわりさよくらね
さこしてきうしるもてるやうかれど。えてしもいひ
まうればよくはるゑれどれらるつつをまえへ
こゆへとろすさからしくおす給ものうまでおん
のんといひしくおもてい。つこはてひすぎされて
くさくれしと思ひおもかんべくくふうわさへ
わりなささきのもとをそとみてもおもひたく
すざれがくに。いひつくられ給この人のかふ

身みつくむつりと
細 源の君身を我身にても
せみをしかり　孟　人をゆ
身をねき事なれハさらへよ
くらふるすハおのか御ことと
源の荻へゆかせし身の詞
なり　箋　真実なり
の心からねれに思ふく
くのくくの給く
みさんまきへくとも
細 みやかなるもわまに
さんしめとしく
う我くそく
孟 直ちく発せ 世云 もくめ
よるさくつれのさ母くく
るへてへりしあつせハ
よのつ給の人サハ之とを
ましきとんり我給乃
荻人の思ふ事の心
りきよ分とえへる対
しその事へなり

むなしくわかやうからけうひとおもられなれバ
まもてうかなうけくもくちきあつとうせ給。細 源の荻よの詞人 箋 是ハ扣揚の荻の袖よ教しておちけるかまの詞く
人きりからてしまきもらうなするハおもふくれ
をしそふこくなんせうしの人をいひけつ給 源氏も世上とそろ不あうまし
ひとひ給へよつむしとなさふしもおもね
バ身あかうむかしえまうをおぼしくなんお
ゆきもう又さうべきへてもゆうされぜりしと。
うねてむめつくなんぎまうれてきこちのへ
よなどうす我くちくうらひ給へのをひ給 細 私なる荻詞こ
らんしのくうりしきたたかんえ此あれまそ 消息かたるもえなるそ侍まし
さうでうくれくいふすべてひよま七てせん 源詞く
しそわくめこのちいさうしへ人ぞまかうまし 細 小君ろうすし

ものかざしてへし
細 空蝉のなをくすかしハ
をかうしう
つろうそうなと
細 人やうりて我ねさる房
なり
まうかりしそ
細 小君かれて源を具し奉
あさくわうかへく
さもくうて
細 うしらかうてなり
師説 さうしらかきての心
源の思てむかみちさまを発
女のおもれハさうしらめきて
し美紙の比なりくり
小君ちやくハ 細 此女の心とたそ
と云ひて又返事の和しなり
と自同自答をなし死ぬまでに
わか身の咎りてわりかのかハ
まわり 花 老人が源氏君を
おもハさそととひて身のつ
ら又ひらりこよかねの比
為みろき事かとそのかほう
まいつれおやすらうるそ

てうとえん。けしきもなくめくらしは給 我なくとし君に帯もよねんとそなる
へかどいひそそうのぬきこえべし。
うしてきぬとりていとくやひぬこ君ら
くかしうる我ゆうしあへでうしおめくう
ちひつ給ふれバかくうきぬどくとやと
らさしおくうにおいさうこぶらは急ぎて。
あれハさるとゆふらくあるうつくし 小君意
よそずるぞといふ秋中よこはかなきあ 答うし よ なり 後達詞
つまうせ給としさうしかりてこさ御へくるもとて。細 外のかく来るし 小君言え
わくるさつくりくへあるそしそて君をとそしいで 細 うろしくもおく源と答へ 源
なりに暁ちうき月く隔るくさうしいぞくみそ
人のうげさしくれバまうこゆはむらハさそと 源の詞く 後達詞

これをつれて
細 小君が民アのおもとゝつれて
ありくとおもへり
いまたゞ今
細 此民アのおもとのせいたかきよ
しく今ハ小君のたけたかゝるべき
とそり老人ハ老人がまゝの
心なり

このおもとさしよりて
細 源と民アのおもとゝいひて
かくるゝ也

みんぶのおもとなめり。けしうハあらぬおも
とのたけだちかなといふ。たけたかき人の
つねにわらはるゝをいふなり。おいびとこれ
をつれてありきけるとおもひて。いまたゞ今
たちならびたまひなんといひつゝ。われもこの戸
よりいでくる。わびしけれど。えはたおしかへさで
わたどののくちにかいそひて。かくれたち
たまへれバ。このおもとさしよりて。おもとハ
こよひハうへにやさぶらひ給つる。をとゝひより
はらをやみて。いとわりなけれバ。しもに侍つる
を。ひとずくなゝりとてめしゝかバ。よべまう
のぼりしかど。なほえたふまじくなんと

ゆくへもきこえで　細 此女の
へときこえでおもてをかくし
たゞさへかくいふ也
いふなり
いよ〳〵おぼしこりぬべし
師説 口に出していふべきにあら
とやよとおもひ空蝉の
つれなさにわりなきにもよ
此老女に逢ひておそろしう
ありしゆへにかくおもひこりぬ
べし

いよのすけにおとりける
細 源の紙男ハいよのすけ
ハおとりけるとも
心づきなしとおもひての給
空蝉にて捨らるゝ身とおもひ
又一段空蝉をあはれにおもふ
かたきとおもひてなく

うれふ。いらへもきかで。あなはら〳〵。いまきこえん
とてすぎぬるに。からうじていで給ふ
なほかゝるありきハかろ〴〵しくあやしかりけりと
いよ〳〵おぼしこりぬべし。小君
御車のしりにて。二条院におはしましぬ。あ
りさまのたまひて。をさなかりけりとあはめ
給ひて。かの人の心をつまはじきをしつゝ
うらみ給ふ。いとをしうて。ものもえきこえず
いとふかくにくみ給ふべかめれバ。身もうくおもひ
はてぬ。などかよそにても。なつかしきいらへ
ばかりハし給ふまじき。いよのすけにおとりける身
こそなど。心づきなしとおもひての給。あり

あこハらうたけれと
細 空蝉のつらきゆかりゆへ小君
をも今ハ思ひはつましきと也
ききこへ
まめやかにの給と 真実にハ
おほさわりまりつれとまろと
しくのふくらし
空蝉の身をかへてけり
細 空蝉ハ蝉のもぬけをいふ也
又万葉第一中大兄三山の哥
ニ虚蝉毛嬬乎相格良思
吉とあるハもぬけにあら
れからうきなかくさ時も
物りしハうへ空蝉の
ひろきく 孟文選蝉蛻と書
かりのめかさらんしうる表
によそへてよめり 花蝶乃
ものかさると身とふと云人
くハ世をのかれたる也
ふうくかの御うへし
抄 物語の荻にさのとれんのと
ゆるぬく空蝉にふさしたお
さくなくしとそくりて
大方も御音信ハ蝉あるう
上の空蝉のから見もあれハ

つゝうち我ぶすゞろなれぞのまゝこまりいまご
てゆ月のごとりて君をとほそへよかなそて
よろづにうらみかつハかたらひ給あこハらうた
けれどつらきゆかりにこそえおもひはつましけれ
とまめやかにの給をいとわびしと思ひたり
しばしうちやすみ給へどねられ給はず
御すゞりいそぎめしてさしはへたる御文にハあらで
たゝうがみに手ならひのやうにかきすさみ給
源 うつせみの身をかへてける木のもとに
なほ人がらのなつかしきかなとかき給へるを
ふところにひき入てもたりかの人もいかにおもふらん
といとほしけれどかたがたおもほしかへして

細 えうちの字をもみすへし
小意
わざとつくろひし文にはあらで
抄 蝉抜く 源心
細 小君のさまを

かくてよ物語の荻よハ折云
侍ハせしと見しかる也
みハ小君かんと秘のふへきや
らくまつらうしへこし
細 なつのすハ其のやかき
らかなべきさる返原て給
て小君とんみさるしと見
めしやとへきし空蝉のいこ
めでけりしむらくし
ひとりみさは 源氏の御様わ
ねさこれくうひとりしまず
のうさうれらくと云へて
いせとのあはれの 河 いせをの
との空せミて衣をあれかり
と人やえうりん 今ハ秋今この
みかりしれなしあるとそ
うらしかうとなど見れて
ちくよりてみて見しる時そ
是ほのさとさとうて今く
いつかうし物しろて云われ
ちハ忘られしきし

御ことつけもなしかのうすきぬハこうちき
のいとなつかしき人かにしめるを身ぢかくならして
見ゐ給へり小君かしこにいきたれば
あね君まちつけていみじくの給
あさましかりしにとかうまぎらはしても人のおもひけん
ことさりどころなきにいとなんわりなき
いとかう心をさなきをかつはいかにおもほすらんとて
はづかしめ給ふひだりみぎにくるしう思へど
かの御手ならひとり出たりさすがにとりて見給ふ
かのもぬけをいかにいせをのあまのしほなれてや
などおもふもたゞならずいとよろづにみだれて

金 うつせみのから
空蝉のもの恥かしく
小君をうらみ給ふて
空蝉の心 源の
源氏の御手
細 小君心く
抄 蝉抜 源の心
源氏ミのは

又この人もうるさすれハ
盃枕よりまろく人もうちさき恋を
後世さきあふこりとし侍りきれ
不可とかれ
二君のらす　わろくるよ
細於の荻の人く此小君にして床
の音信のふへき也契りかま路
ひよさもなきさと思へ
ありしたらの　細とりくへを
ゆるとよさや世の中とき　わる
の後身とこそら人空蝉の心此中
姉君此件の心わりたされハ而て
まゆわくむ人えしより若身よ
正にさこましぬ身そてまろへ
くハとこ思へく貞節の心深し
てたるへされぬ身の　かきとこ
ろ深の粧よとゝ　露
箋　此哥　全篇伊勢集にあり
仍て河海に種とろ見とらへら
是ハ空蝉の贈答にハあらす伊勢
集の古哥　とうく此時に相應
しられハそらうみれけり
に書そふろく哀に悦之本
と伊勢ハ本説て襄にあり
もるゝねとえんるを此空蝉の心にはかり身のかくれて遠なましぬと本くされてとさこ云く

なりでふくろのひよさらまきたろ人をしたすさ
しられバ人これぞてらすへむてみさらいこれの
まうらわりくふつちてもじねのさかされど
はきくそこめ色しおもき酒しきびうろくいかれ　細空蝉に
そてぶれてるなられや衣もたかくへしつまごにさ人　瑞荻の人と思ふ事にて
とさてそ志川しまきといひしわさりつのみもあるぬ　床の哥と空蝉のわさうたにて
は親さきとあきしあふしれまるなかすれづしとあり　床は心のろうす思ひそれとく
くもてみのちうしねど悲びくさよれバごころにお
うてうりきぬきつさきよ
空蝉
ろまきのそはとうく露のこぼれてし
のびくよぬるく袖られ